

演劇におけるシムノン (シムノンとダールの対立)

メグレ警視の生みの親の生誕 100 周年で、「シムノンの年」はピークを迎え、多数のイベントが開催されます。

シムノンの「全作品」が再び書店に置かれ、彼の作品に関する批評本が多数出てきています。しかし、本当に「全作品」なののでしょうか？ 実はそうではありません。ある劇団の支配人から、この機会に上演するために、シムノンの戯曲を一つ見つけてくれと頼まれました。彼は私と同様、シムノンが戯曲 "La Neige était sale" (邦題『雪は汚れていた』)と "Liberty-bar" (邦題『自由酒場』)で、少なくとも 2 度演劇に手を出していたことを知っていたのです。上記の 2 作品以外の無名な戯曲が幾つか存在するはずと思いましたが、なにも見つかりませんでした。

私の興味心はそそられ、シムノンと演劇に関する記事はどうかと考えました。戯曲は見つからなかったものの、記事の題材は見つかったのです。

シムノンの伝記数冊を読みました。『雪は汚れていた』のヒットに関する数行が見つかりましたが、それだけです。

最後に参照したピエール・アスリンによる分厚い伝記、『シムノン』(ジュリアール出版、1992 年)をこれから多々引用していきます。

キャリアが飛躍する他の作家と同様、シムノンも 1930 年代に演劇に興味を持ちます。何故なら、演劇は重要な収入をもたらしながら、彼の知名度を揺らぎ無いものにしてくれると考えたからです。

ただ、この演劇への興味は長続きしません。映画が期待以上の望みを叶えてくれるからです。

第二次世界大戦中に、映画はフランス人が一番好む娯楽となりました。政治的意見が無く、庶民的なメロドラマであるシムノンの小説は、観客とコンチネンタル(戦争中に存在した、ドイツ出資のフランスの映画製作会社)の両方を満足させるための長所を全て揃えていたのです。

シムノンは、絶好のチャンス射止めるのですが、それはまた別のお話です。

短く波乱万丈だったシムノンと演劇の関係を、好奇心旺盛な推理小説マニアの皆さんと一緒に見てみましょう。

ピエール・アスリンを引用しましょう：

「1931 年、新しい国際的名声(アメリカでの成功)に酔い、シムノンはイタリアでの彼の作品の出版者、アーノルド・モンダドりに、劇団で、彼の小説を基にした舞台を演じることを、拒否します。舞台用の脚色を書く暇は無いのです……」

1936年、ブリュッセルの王室劇場サン・ユベールにて、初めて芝居を立ち上げます。シムノン自身は自身満々です：常道に従わず、ありきたりの状況や登場人物を拒み、演劇界を改革するつもりなのです。

戯曲"Quartier nègre"（『黒人街』）は、3幕7場で、ジャン＝ピエール・オーモンと15人の黒人俳優によって演じられます…

（シムノンは、初演に関する宣伝攻勢を企画しますが、当たりませんでした。）

数週間後、彼自身の小説"Les Pitard"（『ピタール家』）で脚色に再挑戦し、ラジオ局ポスト・パリジャンで、"A bord du Tonnerre de Dieu"（『貨物船神雷号に乗って』）というタイトルで、夜9時に放送されます。

1938年から、一時的に演劇を諦めます。

彼の演劇へのためらいは、映画に対するものと同様です：

本の執筆の際には、彼一人が全てをコントロールします。彼の本を映画化する場合、クランク・インが近づくにつれ、彼の役割は薄くなります。最後には、彼は全く役立たずになるのです。このような状況は、常に自分の世界と制作システムの中心に居る人間には、非常識に感じられるものです。しかも、まだ若く将来性のある成功が、彼の中で一番敏感な、虚栄心、自己中心主義、うぬぼれを喜ばせている時に、このような状況に初めて遭遇するのです…

シムノンは、他人と共同の企画のために自分らしさを消すことを拒む、あか抜けた作家であり続けるのです。2つの脚本の執筆に協力した後も、作家が言葉で示唆することを、なぜ映画監督が映像で描かなければならないのか、理解出来ません…

脚色家が映画化のために小説を自由に脚色することが、全く許せません（シムノンが悪賢いからではなく、慎重なビジネスマンだから、と言っておきましょう）。「どんな詳細も見張り、自身の署名と権利を妥協無く守る、恐るべき、かつ賢くうるさい管理人なのです。」

とはいえ… 戦前にリヨンのセレストン劇場で、"L'Aventure"（『冒険』）について講演を行った際に、彼への限りない尊敬心を抱いたリヨンのとある記者に出会います。

「地方の賞を受賞したばかりの本を書いた若い男が、シムノンの作品に関するエッセイを書きたいと唐突に連絡をすると、シムノンは彼を励まします。何が起こるかわからないものです… 実は、リヨンのこの若い記者は、戦前に彼の講演に出席し、感嘆していたのです。二人は短い会話を交わし、若者はシムノンの作品を何でも読む読者となっていたのです。そのようなB級文学に時間を無駄にするな、というパリのマスコミ関係の先輩のアドバイスに耳を傾けず、この若者は、この試みを開始する前に、シムノン本人に許可を頼みます。シムノンは快く承諾し、しかも、細かいミスをさけるため、原稿に彼自身目を通すことまで提案します。

この若者は、フレデリック・ダール、当時22歳です。」

25歳で出版者となったダールは、シムノンの作品1作を出版するために彼と文通を始め、戦前に行われた講演を、1946年に、サヴォワ出版の文学紙『エタンセル（ひらめき）』に掲載するに至ります。

彼らの関係を、ピエール・アスリンを参考に、もっと深く追求してみましょう：

「ジドが亡くなる直前に、シムノン自身若い同業者の師となります。戦後直後から、ジドとは別の理由でシムノンに関するエッセイの執筆を諦めたフレデリック・ダールと文通を続けます。この「若者」をとっても気に入っており、当初から才能があると評し、援助し、励まします。」

ジド(1869年生まれ)、シムノン(1903年生まれ)、ダール(1921年生まれ)。

文学3世代。二人の間に居るシムノンは、先輩にアドバイスを仰ぎながら、後輩にそれを伝授します。先輩となるジドとは、金銭以外の多数のテーマについて語り合います。ジドは、1947年にノーベル文学賞を受賞し、重要な印税を受取るまで、年金で生活していたからです。後輩となるダールとは、金銭についても話します。若い作家であるダールは、いつか文学で生活することを不安に思っています。「君のキャリアを友人として注意深く見守っています。(…)君の才能を疑ったことはありません。君も僕もふざけた作家ではないため、日常生活におけるバランスと楽天主義を保てるのです。(…)もし誰か紹介して欲しい人がいれば、僕は喜んで紹介するからね。」

「ダールが、文学を諦めずに生活をするために、映画に関わりたと言ったため、シムノンは、自分が良く知っているその分野に彼を招き入れ、推薦状を書くことを提案します。これは彼にとっては、珍しいことです。確かに、彼がジドを師と仰ぐように、彼を師と仰ぐ若い作家は珍しいです。そのため、必然的に彼らは一緒に働くこととなります。ダールの発案による『雪は汚れていた』の舞台化が、その機会となります。ダール自身、実際に彼が目撃した戦後の正式な裁判抜き処刑を基に物語を書いていたため、同じ題材を扱うこの小説に魅了されます。1946年に"La Crève" (『死』) がリヨンで出版され次第、ダールはシムノンに本を送り、シムノンを熱狂させます：

「君の小さく偉大な本…熱心に読みました。僕自身がぜひ書きたかったと思うページが、4、5ページありますが、それ以外のページが悪かったわけではありません。昔から君の才能を信頼していましたが、ここまで早く高く飛躍するとは思っていませんでした。次回作が待ち遠しいよ!(…)まだ少し文学的すぎる台詞には気を付けてください(君の年でこんな短所すらない本を書いていたら、恐ろしい)。心から喝采します。」(…)

この直後にシムノンは、普段は嫌がる序文を、ダールの次回作"Au Massacre mondain" (『社交界の虐殺で』)のために書くことを受諾します。

(…)しかし、『雪は汚れていた』の脚色を二人で書くことで、初めて二人の間に見解の相違が現れます。地理的な距離と多数の仲介者が、誤解を招き易くします。(…)

シムノンは、二度と戯曲を書かないと誓っていました。演劇を閉ざされた世界と嫌い、別の職業だと判断していました。場所を描写する時は括弧を付けてしまい、心理状況を描いてしまい、登場人物の略歴を書いてしまうのです… それにも関わらず、後輩の初稿を読み、嫌なことを無理に自分に強いるのです。初稿を全体的には満足出来ると判断しますが、ダールがドイツによる占領時代に物語を設定したがることを、シムノンは架空の国に設定したいと考えます。シムノンは幾つか改正を行います。以下のようにその理由を述べます：「この舞台が禁止にならないために、またスキャンダルを使用していると避難されないように、劇的な面で、強姦の重要性を抑えました。フランクの個人的なドラマにもっと焦点を当てるようにしました。ホルストに関しては、後で話し合しましょう。ロットに関しては、小説に出てきたままです。個人的には、劇中の節約された「緊張の緩和」は、好きではありません。」

結局、シムノンの本なのです。彼が作者で、ダールは、彼自身が言うように、協力者でしかありませんが、脚色家として二人の名前が対等に並んで表示されなければならないと主張しています。

初演は、1950年12月12日にウーヴル劇場で、ダニエル・ジェランとリュシエンヌ・ボガート主演で演じられ、大成功をおさめ、批評を通し、海の向こう側のコネチカットまで、うわさが広まります。それにもかかわらず、シムノンは大憤慨です。記事を読み、演出家のレイモン・ルローが、脚色を脚色したことを知ったからです。わかりにくい点が多いと判断し、小説に出てくる老人をナレーターに取り替え、自分でその役を演じることにしたのです。シムノンは、このように作品をかきまわされたことに憤慨します。改正自体にではなく、「僕の下承無しに僕の文章に手を加えてはいけません！」という原則を守られなかったことに憤慨します。

演出家がシムノンをただの供給者のように扱い、彼の下承無しで舞台を準備したのです。彼が一番嫌悪する状況に陥ったのです：署名をすることで、彼が承認していない文章を保証し、受け入れたのです。

出版者が原稿からコンマを取ることも承諾しない作家の一人であるシムノンにとって、それは許せないことです。

シムノンはフレデリック・ダールに彼への友情を保つことを保証します。しかし、忘れたわけではありません。彼らの関係は、昔のようにはいなくなりました。」

1952年3月19日、シムノンの「帰還」を祝うカクテルパーティーが、ホテルクラリッジにてスヴェン・ニールセンによって行われます。「皆、その日のスターに挨拶するために、並んでいます。人込みの中には、パリの有名な俳優、脚本家、演出家、記者、作家と出版者が見えます。皆が持っている唯一の共通点が、シムノンなのです。(…)作家フランシス・カルコがシムノンの腕をつかみ、自分から第一歩を踏めないフレデリック・ダールのもとへ連れて行きます：

「僕らの共通の脚色家を知っているかい？」

「僕に脚色家はいない」

と冷たく言い離し、サッとダールに背を向け、ファンの群れに戻るシムノン。「師」に会えると喜んでいたダールは、一晩中泣きました。」(ピエール・アスリンがフレデリック・ダールから聞いた証言による)

フランソワ・リヴィエールのバージョンを引用しましょう。

(『フレデリック・ダール、又はサン・アントニオの私生活』フルーヴ・ノワール出版、1999年)は、同じくフレデリック・ダールの話を基にしています。出来事には変わりはないのですが、前のバージョンに欠けている詳細と不備を補っています：

「シムノンは『雪は汚れていた』を出版したばかりです。フレデリック・ダールは、この小説を基に素晴らしいラジオ劇を作ることが出来ると考えます。ダールはすぐにシムノンに手紙を書き、了承を得ようとします。10月15日、シムノンはアリゾナ州のトゥマカコリから、『雪は汚れていた』のラジオ用の権利はすでに譲り、アメリカのラジオ局で近々制作されることになっていると返答します。「良ければ、他の小説を選んでください。お好きなものを選んでもらって構いませんが、僕に事の次第を知らせてください。僕がどれだけ君を信頼しているかご存知でしょう。」追伸として、以下が加えられます：「もちろん、『雪は汚れていた』の演劇に関する権利は手元に残っており、僕の小説の中では一番脚色し易い作品だと思います。ただ無理にとは言いません。」

この最後の言葉が、ダールに希望を与えます :なぜ、自分が書きたかったと思うほど素晴らしい文章を基に舞台用の戯曲を書かないのだ? と考え、すぐに仕事に取りかかります。

1949年初頭に、フレデリックはシムノンに脚色した戯曲を送り、シムノンは1月19日に以下のように返答します :

「親愛なるダール君、これは、君が責任者の本当の冒険ですね!二度と戯曲は書かないと誓っていました。しかし、君の原稿を受け取った時、少し修正し、幾つか提案をしようと思い、タイプライターに向かいました。今から9日前のことです。特に序幕は何か気になるところがありました。初日、5、6時間タイプに向かい、序幕と第1幕をすっかり書き換えてしまいました。2日目には第2幕を書き、3日目には第3幕を(…)結局、全てを再度口述し、書き取らせました。このように、あらかじめ計画すること無く完成させた作品をこの手紙に添付します。」

その後シムノンは文通相手に、すでにニューヨークの彼のエージェントと英語での演劇化の権利を交渉し、「後はフランス語バージョンを完成させるのみ」と伝えます。また、原稿の冒頭に以下のように書くことを提案します :

原作 : ジョルジュ・シムノン
脚色 : ジョルジュ・シムノンとフレデリック・ダール

2月25日、シムノンは新しい手紙にて、彼らの戯曲は、「古くからの友」で、パリで有名な演劇事務所を営むブランシュ・モンテルの手元にあると伝えます。また、フレデリックが提案していた修正点を考慮せずに、幾つか訂正を施したと伝えます。

9月30日、シムノンはテュクソンから、以下のような手紙を送ります :「信じてください。ポスターに僕一人の名前が掲載されることに、僕は君以上に困惑しています。君が望むなら、この提案に絶対反対だと言いますよ。しかし、もし僕が僕らのコラボレーションに関する重要な記事を書き、プログラムの中でもそのことについて長く語れるとしたら、それで満足してくれますか?それに、舞台の初日を迎えると同時に、『ウーヴル・リーブル』にも戯曲が掲載され、ジョルジュ・シムノンとフレデリック・ダールの名で発表されます。『ウーヴル・リーブル』に関しては、君の承諾を待たずに、了承を出しました。だいぶ前から、フェアール出版には、何かを提案すると言っていたし、またとても良い配給でもあります。(…)親愛なるダール君、以上に関し率直な意見を聞かせてください。僕は自分だけいい目をみたがるような先輩ではありません。」

頑固かつ不正直な偉人はわがもの顔に振る舞い、金銭的困難に陥っているフレデリックは、そこから抜け出したいがために、渋らずにその態度を受け入れるのです。フレデリックは、印税が入ってくることを期待し、『雪は汚れていた』の放送をラジオ局に提案する「許可」をシムノンに求めます。シムノンはこれを許可しますが、舞台用の戯曲に関する交渉は成立しません。

11月5日、フレデリック・ダールは、レイクヴィルから、彼らの戯曲がウーヴル劇場で、レイモン・ルローの演出でリハーサル中だというシムノンからの手紙を受取ります。「ブランシュ・モンテルが長い手紙を送ってきました。ただ、僕は何も知りません。丁度君に、彼女は期待はずれなので、君のやりたいようにしてください、と手紙を送るところでした。君は現地に居るので、情報を下さい。協力者として、君も情報を得る権利があります。僕は君をいつでも支援しますからね。」

11月27日、『雪は汚れていた』は、パリのラジオ局で放送されます。1950年12月11日には、初演が行われ、成功をおさめます。

この成功は、まだ有名な脚色家ではなく、帳尻を合わせるために必死で働くフレデリック・ダールにとって、活性剤となります。他にも、お互い気が合うフランシス・カルコの"Jésus la Caille" (『うずらのイエス』)を脚色した舞台はふさわしい成功をおさめます。

そのフランシス・カルコと一緒に、フレデリック・ダールは、1952年3月19日に、シムノンのヨーロッパへの「帰還」を祝うためにスヴェン・ニールセンがクラリッジホテルで開いたカクテルパーティーに出向き、破壊的な応答を受けるのです。

劇的事件が起こり、フレデリック・ダールは目に涙を浮かべて遠ざかります。ひどい夜を過ごした後、「彼は黙っているわけにはいかないと、翌日クラリッジに戻り、幸運にもホールでシムノンにばったり出会います。シムノンは笑顔で、前日のトラブルをすっかり忘れているようです。宿泊しているスイートルームまでフレデリックを連れて行きます。若い同僚の前で汗にまみれた服を脱ぎ、秘書にごしごしとこするよう頼みながら、ぶつぶつと言います：「どうした、ダール君。確かにルローと君は軽々しく僕に話しかけたけれど、たいしたことではないじゃないか。」

「フレデリック・ダールをまるで兄弟のように抱擁するシムノンにとって、トラブルは過去のことです。しかしこの親睦の接吻は、賞賛の対象を失った者の心には、傷を残すのです。」

ダールの傷は塞がれず、彼は一生根に持つのです。

しかし、もうひとつシムノンの小説を脚色した戯曲が存在し、フレデリック・ヴァルマンによって署名されています。それは：

『自由酒場』

フレデリック・ヴァルマンの3幕の戯曲

原作：ジョルジュ・シムノン

著作権：フレデリック・ヴァルマン、1955年

ロシアを含む世界中での複製、翻訳、脚色の権利を含む

(『ウーヴル・リーブル』、114号、1955年11月発行、アルテム・フェイアール出版)

これはシムノンが決めた規則に違反しています！

特に彼は、付属の権利(映画、舞台、テレビ)を出版者に管理させる同業者とは違い、彼の名において著作権を取り戻した初めての作家と自慢しているのです。

しかし、フレデリック・ヴァルマンに彼の考えを述べさせましょう。(1981年に発行された雑誌『813』の第3号より)：

どのようにメグレ警視が舞台デビューをしたか

「フレデリック・ヴァルマンは、サン・ジェルマン・デ・プレの「信者」(知識人)の間でしか知られていなかったため、この名前でも客寄せをするのは難しいとわかっていました。これは不利な条件になると考え、有名な作家の小説を舞台化すれば、2階席の最後列の補助椅子の席まで売れるのでは、と考え

ました。一番に浮かんだのが有名なジョルジュ・シムノンでした。(…)アポイントをお願いし、すぐに彼に会うことが出来、僕の嘆願を早口で述べました。僕の未熟さにあっけにとられたようですが、彼を特徴する穏やかさで、僕をテストすることを了解してくれました：僕のやりたいように『自由酒場』を脚色し、納得いく結果ができれば、正式な許可をもらえるというのです。何枚もの手紙を受取った後、「良くやった」と始まる手紙をもらい、待ちに待っていた契約書が添付されていました。¹(…)文学界の他の仲間同様彼を尊敬していますが、それに加え、彼は僕の心の中で、とても重要な位置を占めています！彼は、こんなに若い僕を(僕も!)、期待以上の環境の中で、デビューさせてくれたのです²。」

フレデリック・ヴァルマン

この文章はシムノンを馬鹿にしており、復讐にちかいものです。(ダールとシムノンだからこそのようなおとしませをするのでしょうか。)

今まで誰もこの文章を指摘していませんし、1966年9月に『ア・ラ・パージュ』の27号に掲載されたフレデリック・ヴァルマンの"Les Pires extrémités" (『やけっぱちな行動』)の序文と比べられたこともありません。

「フレデリック・ヴァルマンの『やけっぱちな行動』は、素晴らしい推理小説です。しかし、登場人物と作者のどちらが最も驚かせるのでしょうか。何故なら、フレデリック・ヴァルマンは、フランス文学界のレオポルド・フレゴリ(早変わりの名人)だからです。人気推理小説作家、サン・アントニオシリーズのこっけいきわまる登場人物ベリュリエの生みの親、ぞんざいな『フランスの歴史』を書いた歴史学者、ヒット作ばかりを生み出す劇作家、ある時はヴァルマン、ある時はダール、またある時はサン・アントニオ、しばしばフレデリック、彼自身、彼が生み出した登場人物の中で一番悪漢な人物なのです。」

ある元記者によると、ジョルジュ・シムノンが彼とプライベートな会話をした際に、スヴェン・ニールセンが彼を讃えるために行ったパーティーで起こったトラブルに関し以下のように説明したそうです。

『雪は汚れていた』の脚色のせいで不和状態にあったレイモン・ルローが近くに居たため、混乱し思わず「僕に脚色家はいない」と言ってしまったそうです… どちらにしろ、ダールは金銭的に多くの報酬を受け取るのです。

これで辻褄があいます。

この出来事に関する私の解釈は以下の通りです：

1950年末の『雪は汚れていた』の出版と、1952年3月19日に起こったトラブルの間に、ダールは『自由酒場』の脚色を終え、劇場と俳優(とあるフレデリック・ヴァルマンを含む…)をすでに見つけていましたが、彼の名前をシムノンの名前と並べて舞台を立ち上げることが出来ず、仕様がなくこの方法を見つけた(またはダールがシムノンに無理矢理強いた)のではないのでしょうか。

1 ジョルジュ・シムノンの長所として、(とても大きな!)寛大さ、忍耐、友情の暖かさに、気前の良さも加えるべきです。ほんの少しの印税をもらうつもりでしたが、この契約書の中で、僕に半分もの印税を惜しみなく与えてくれるというのです。

2 この「小手調べ」の後、ジェームズ・ハドレー・チェイス"Traquenard" (『罟』)やボワロー&ナルスジャック"Les Louves" (邦題『牝狼』)、舞台名"Meurtre en fa dièze" (『Fシャープの殺人』)など他の作家が僕を信頼してくれ、自立することが出来ました…

僕は、1955年の『自由酒場』の舞台化によって、シムノンがダールへ、金銭的に借りを返したと確信しています。もちろん、人間関係上の被害は大きく、取り返しがつかなかったでしょうが。

この機会に生まれたコンビ、ダール/ヴァルマンは、1984年まで途絶えること無く続きます。この年に、ダールの人生に重要な出来事が起こり、私生活だけではなく、作家生活も整理し、邪魔になった仮名の使用をやめるのです。

フルーヴ・ノワールから出版された作品のタイトルを見てみましょう。1971年のカーター/ヴァルマンによる"Ma cavale au Canada" (『カナダでの逃走』)、1983年の"Ma canaille au Canada" (『カナダの悪党』)、1989年の、サン・アントニオシリーズの一作、"Ma cavale au Canada" (『カナダでの逃走』)! これらは、ダールの恨み深さを表しています。

シムノンについては、またピエール・アスリンを引用しましょう:「何年も経ったある日、シムノンは息子の一人に、サン・アントニオの冒険のようなつまらないものは読むな、とわめき散らします。」(ピエール・シムノンからピエール・アスリンへの証言)

作者とその脚色家の間の対決は、ダールの勝利に終わるのです。

その後フレデリック・ダールは、舞台と映画用の作品を一人で原作無しで書けることを証明し、文学界の「大物」の地位を確固たるものにするのです。

とても残念なことに、その後シムノンの作品は舞台化されなくなるのです。

メグレ警視の舞台人生は、『自由酒場』の第3幕で終わってしまったのです。

ティエリー・カゾン 2003年3月
(小林恵訳)